

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町65
電話 03(5228)3171 FAX 03(5228)3175
発行者 総主事 司祭 相澤 牧人

ランベス会議

全体の概要と雰囲気

東北教区主教 ヨハネ 加藤 博道

7月16日から8月3日までの約3週間、カンタベリー大聖堂および車で15分ほどの距離にある広大なケント大学のキャンパスを会場に、第14回のランベス会議が開催され、約650名の主教と、その配偶者、スタッフ、スチュワード、通訳者等を含めて計約1500名が参集した。世界の、そして日本聖公会の将来にとって相当に重要な意味を持つことになるであろう今回のランベス会議については、今後も継続的に複数の側面から報告や考察がなされる必要がある。その最初の報告ということになるので、今号では出来るだけ全体的な雰囲気をお伝えするように努めたい。

中心の課題は

少なくとも小職の理解では、このランベス会議の主たる目的は、アメリカ聖公会が同性愛を公言している司祭を主教として承認・按手したことに端を発する(またカナダの同性の結びつきへの祝福式文の公認等)聖公会の一致の危機に直面しつつ、しかし同性愛そのものについて議論することではなく、各管区・教区がそれぞれに非常に大きな社会的背景、状況の差異を持ちながらも、なおいかにして聖公会(アングリカン・コミュニオン)として共にあることが出来るか、という点に置かれていた。よく耳にした言葉で言えば「共に属すること」(belonging together)であり、カンタベリー大主教のメッセージも繰り返し「コミュニオン」という言葉の深みを訴えるものであった。

プログラムにおいて(黙想、礼拝、聖書研究、インダバ等)

その意図はプログラム全体に通底しており、会議はカンタベリー大主教による3日間のリトリート(黙想)から始まり、会期中毎朝行われた少人数(平均8名)による『ヨハネによる福音書』の分かち合いも、各主教たちが自分の教区の状況を背景に率直に、相互受容的に語り合う場として大変重視された(同福音書の「すべての人を一つにしてください」〔17章〕や「イエスはまことのぶどうの木(わたしにつながっていなさい)〔15章〕という内容も、明らかに聖公会の直面する状況の中で読むことが意

会議・プログラム等予定

(前回報告以降追加
および9月10日以降)

- 8月
18日(月)~19日(火)文書保管委員会・翻訳小委員会(8月28日~29日から変更)
- 9月
1日(月)年金資金運用管理チーム(東京教区事務所)
4日(木)教役者遺児教育基金・建築金融資金運営委員会
8日(月)~10日(水)人権セミナー(大阪)
12日(金)正義と平和・憲法プロジェクト(中止)
16日(火)青年委員会(中部教区センター)
18日(木)常議員会
19日(金)第184(臨時)主教会
20日(土)主教被選者 司祭 サムエル 大西 修主教按手ならびに大阪教区主教就任式
29日(月)~30日(火)文書保管委員会・翻訳小委員会
- 10月
2日(木)管区共通聖職試験委員会(中止)
7日(火)法憲法規委員会
9日(木)聖公会・ルーテル教会協議会(ルーテル市ヶ谷センター)
15日(水)主事会議
16日(木)聖公会・ローマカトリック教会合同委員会
17日(金)東日本地区日本聖公会資料保管に関する協議会(東京教区事務所)
21日(火)~23日(木)第185(定期)主教会(中部)
27日(月)~29日(火)文書保管委員会・翻訳小委員会
28日(火)年金委員会
30日(木)収益事業委員会
- <関係諸団体会議等>
9月16日(火)NCC臨時財務委員会
10月1日(水)~9日(木)XCEA主教会・エグゼクティブ・ミーティング(バンコク)

図されたと感じる)。さらに今回の目玉とも言える「インダバ・グループ」は、やはり連日開催の大体5つの聖書グループ(従って40人ほど)からなる分科会であったが、採用された「インダバ」という言葉がアフリカの言葉に由来し、共同体の中の問題についてお互いの意見と経験を聴きあい、異なる意見を否定することなく、一つの結論を急がずに対話していく趣旨のものであると強調された。日々の主題は「聖公会のアイデンティティ」「主教と福音伝道」「主教と社会正義」「主教と他の諸教会」「主教と環境(問題)」「主教と諸宗教」「主教と宣教における聖書」「主教と人間の性」、そして「聖公会契約(アングリカン・カヴァナント)とウインザー報告のプロセス」と、どれ一つとっても重要なものであるが、それぞれについてかなり自由な討論をし、その内容は各グループで選出された「聴き手(リスナー)」を通して、また「ヒアリング」というような全体会のプロセスを経ながら、最終的にはこのランベス会議の「省察(リフレクション)」として、まとめられることとなった。

大きな恵みと、簡単ではない課題

最初のリトリートや日々の聖餐式、礼拝においても、世界各国からの650人の主教たちが、共に祈り、歌い、沈黙している姿は、やはり印象的であった。また聖書研究やインダバ・グループを通して、今まで見知らぬ存在であった諸国の主教たちが、同じ信仰に生かされている同志である

と再認識出来た恵みも大きい。同時に聖公会と言いながら、それぞれの教区・教会が置かれている社会的状況がいかに違っているかについても思いを新たにさせられた。あるパキスタンの主教の司牧する地域は、アルカイダ、タリバンの活動する地域であり、東南アジア、アフリカの多くの教会にとって、イスラムとの関係、共存がいかに切迫した課題であるかも度々聞かされた。一方



グループ・プログラムにて

には同性愛がほとんど認知されている社会の中の教会があり、他方にはイスラムとの関係から、同性愛の指導者や女性の指導者は受け入れ難いという教会がある(一つの側面としても)。HIV / AIDSの脅威も緊迫したものであった。

多様性を持ちながら、従来聖公会は聖餐的一致と交わりを、とくに明文化した文書を必要とせず、相互の信頼関係の中で保ってきた。しかし今はそうは言うておられず、一致を保つための「構造」が必要になってきていると、それが具体的な課題であった。「ウインザー報告」以来の「聖公会契約(アングリカン・カヴァナント)」が示すところの、「一致のために4つの機関(カンタベリー大主教・ランベス会議・聖公会中央協議会・首座主教会議)」のこと、そして「聖公会契約」の最終部分にある「管区がコミュニオンの諸機関(上記)



全体プログラム

の要請を採択しないことを選択するという極限の状況においては、それはその管区自身によって、あるいは諸機関の決議によって、当該管区によるこの契約の目的の効力と意味の放棄であると理解され、それは彼らがこの契約的關係を他の管区との間に再構築するまで続く(3・2・5項。試訳)という条項に関心を持たざるを得ない。高名なユダヤ教指導者の講演があり、日本語では同じ「契約」と訳す、条件的取引であるcontractとcovenantの違いが力説され、covenantとは「愛における関係の問題」であると力説されたが、課題が解決したわけではない。祈祷書にも法憲法規にも一切、カンタベリーの主教座との交わりに関する言明のない日本聖公会にとって、カンタベリーの主教座とは何なのか、また首座主教の意味と機能等、同性愛をはじめ、人間理解

の深みを、性という面からもきちんと学んでいくことの必要と共に、日本聖公会の教会としての自己理解についても改めて考えていく、大事な契機が与えられたと感じている。英語圏の諸国はもちろん、東南アジア、アフリカ等も英語が公用語であったり日常語であったりする。言語の点だけでなく、歴史と文化の問題として、東北アジアは聖公会全体の中であえて言えば「例外的存在」と感じる。そしてそれだからこそその視点と貢献もまた可能なのではないかと感じつつ、帰国した。日本人を含む多くのスチュワード、通訳者等の貢献、スパウズ(お連れ合い)の充実した会合、ロンドンにおいて行われた「証しの行進」と国連のミレニアム・デヴェロップメント・ゴールスのこと等、触れるべき多くの事柄があるが紙面が尽きている。

夢の中で想う

管区事務所総主事の職務に就いてからことに、日本聖公会という宣教協働体の宣教に思いを巡らしている。日本聖公会は来年に宣教150年の記念の年を迎える。この時を「すでに」と考えるか「まだ」と考えるかによって生き方に違いが生じてくるのではないかと思う。私自身、昔、こんなことを言っていた。「すでに」と考えるならば、それある意味では充分と考えられ、保身に向かうのではないか。しかし「まだ」と考えるならば、様々に考え、制約に捕らわれず、度量を大きくして挑戦していくことができるのではないかと。

教会の使命は宣教だ。宣教というけれど、教会の教勢は衰退の一途をたどっているという声をよく聞く。ではどうすればよいのか。頭の巡りが悪いためか、うつらうつらとしてきた。そして、夢を見た。

宣教しなければ、衰退の一途をたどっている。日本聖公会の将来はどうなる。……というけれ

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤 牧人
ど、そんなに大変なことではないよ。教会に属する私たち一人一人がその役割を果たせばいいんだから。

80歳以上の方が、神さまは本当におられ、私たちは支え、導いてくれているのだと、その人生経験の長さ、深さから語り続けてくださるなら。

70歳代の方が、毎主日、教会の礼拝に参加し、礼拝堂に座り、祈る存在感を人々に示し続けてくださるなら。

60歳代の方が、若者を黙って支え、慈しみと愛をもって関わっていくなら。

50歳代の方が、知恵を出し、力をささげ、教会を支えていくなら。

40歳代の方は、一番動くことができる年代であるから、様々な役割に積極的に関わり、挑戦してくださるなら。

30歳代の方が、目と耳と心を使い、あらゆることを学びつつ実践していくなら。

20歳代の方は、支えられる喜びを十分に味わ

うことだ。何故なら、「受けるよりは与える方が幸いである」と言われたイエスの言葉を理解するためだから。それを知った時、与える方に関心が向いていくから。

10歳代の方は、無条件に教会生活を楽しんでほしい。その姿は魅力的だから。

10歳以下の方たちは、「子どもの声は天使の声」という教会の言い伝えのなかで、無邪気に過ごしてほしい。そこに希望があるから。

教会のそんな姿が、人を引き寄せ、神をより指し示することができるのだろう。

.....そして、目が覚めた。

主事会議

第57(定期)総会期第1回 7月9日(水)

主な協議事項

1. 日本プロテスタント宣教150周年記念賛同について
賛同することとした。(2009年7月8日~9日に記念式典が行われる)
2. 渉外主事ミャンマー派遣について
 - ・ 目的: DIFTCの責任者 Stylo 司祭のバハン教区主教就任式と被災地調査
 - ・ 期間: 9月中旬約1週間
3. スコーレプラザ法人会員入会について
日本聖公会として入会することを検討(継続協議)
4. 「ハラスメント防止を進めるための分かち合いと研修会」援助について
援助額を30万円とした。
5. 『管区事務所だより』発行目的について(確認)
6. 主査推薦について
各主事より以下の主査を総主事に対して推薦した。
 - (1) 宣教主査: 司祭木村直樹(北関東)
 - (2) 渉外主査: 司祭 西原廉太(中部)
 - (3) 広報主査: 執事 荒木太一(京都)、竹田和子(東京)、伊達安子(東京)、吉村登志子(横浜)、司祭 宮崎 仁(横浜)
宮崎司祭は一身上の都合により辞退
 - (4) 財政主査: 久保田秀雄(横浜)、中林三平(横浜)、高橋 保(横浜)、山中 一(中部)、若宮英生(北関東)
7. 総会決議による執行事項等について

以下を確認

- (1) 祈祷書の一部改正、確定の件
「使徒信経」の改正に伴い、カードを作ることとした。
 - (2) 聖餐式において用いる詩編を一部改正する件
 - ・ 『教会暦・日課表2009年』に載せる。
 - ・ 総会決議録を参照して頂くよう『管区事務所だより』で知らせる。
 8. 第57(定期)総会期諸委員について
 9. 「日本聖公会150年の歴史」の出版について(継続審議)
第57(定期)総会期第2回 9月3日(水)
- ### 主な協議事項
1. NCC第37回総会代議員および常議員選出に関して
常議員会(9/18)への提出原案作成。
総会代議員(13名)、内常議員3名
 2. 第8回日韓NCC=URM協議会開催賛同金拠出に関して
前回同様10万円を寄附することとした。
 3. プレ宣教協議会委員会に関して
宣教主事よりの原案を協議し、常議員会へ提案することとした。
 4. 各主事の委員会担当、諸分担に関して
 5. 宣教150周年募金に関して
主事会議から実行委員会に対して募金方法について提案することとした。
 6. 「日本聖公会150年の歴史」の出版について
150年記念礼拝実行委員会作成の小冊子とは別に、管区としての出版について前向

- きに検討
出版の可能性を探ることとする。
(継続審議)
7. 2008年度「社会事業の日」の信施奉献先
に関して
聖社連に今年度の奉献先の推薦を依頼す
る。
8. 正義と平和委員会の委員構成に関して
常議員会の決議に従い、谷主教、宣教主
事、総主事で検討された原案について、下
記の意見を添えて、常議員会に提案するこ
ととした。
・男性信徒1名を加えることを検討する。
9. 渉外主事海外出張に関して
9月18日から10月7日までの出張を承認。
・ ミャンマー聖公会パハン教区主教就任式
に出席
・ パーンサバイとモニカ久野奨学生訪問(タ
イ)
・ CCEA会議(10/01 ~ 07、タイバンコ
ク)
10. ミャンマー聖公会パハン教区主教主任式
祝金に関して
祝金として500ドルを支出する。
11. FoDoT(=Friends of Deaf of Tanza-
nia 耳の不自由なタンザニア人たちの友)
支援継続に関して(次回協議事項とする)
次回以降の会議
10月15日(水)、11月5日(水)
- 各教区
- 北海道
- ・ 2008年教区修養会 10月24日(金) ~ 26
日(日) 道立青少年会館(札幌市真駒内)
講師：鈴木育三執事(北関東教区)
- 東京
- ・ 2008フェスティバル「あなたとともに」9月2
3日(火) 10時半 立教女学院
- 中部
- ・ 教区研修会「みんなで教区・教会の将来を
考えよう!」9月14日(日) ~ 15日(月) ホテル
アルカディア(長野県飯綱高原)
- 京都
- ・ 第49回信徒の集い「大和に集い、沖縄に出
会おう!」9月22日(月) ~ 23日(火) 榎原口
イナルホテル
- 九州
- ・ 2008年秋の信徒研修会 バイブル・シェアリ
ング『あなたにもできるイエスさまのお手伝い』
講師：柳原義之司祭(京都教区) 9月22日
(月) ~ 23日(火) ホテル熊本テルサと熊本
聖三一教会
- 関係諸団体
- 日本キリスト教連合会
- ・ 第34回キリスト教系宗教法人のための法人
事務・会計実務研修会 10月6日(月) ~ 8
日(水) 天城山荘

《人 事》

東京

司祭 バルナバ関 正勝	2008年9月1日付	目白聖公会協力司祭としての勤務命令
司祭 ペテロ広澤敏明	2008年8月31日付	練馬聖ガブリエル教会牧師解任
	2008年9月1日付	主教座聖堂付および練馬聖ガブリエル教会 協力司祭としての勤務命令
司祭 セラピム高橋 顕	2008年9月1日付	練馬聖ガブリエル教会管理牧師任命
司祭 ニコラス中川英樹	2008年9月1日付	三光教会副牧師任命
聖職候補生 セシリア下条知加子	2008年8月14日付	分餐奉仕許可

中部

司祭 サムエル大西 修	2008年8月31日付	名古屋聖マタイ教会牧師の任を解く。
	2008年9月1日付	主教座聖堂付を命じる。 主教座聖堂付を解き、大阪教区への転籍を認める。
主教 フランシス森紀旦	2008年9月1日付	名古屋聖マタイ教会管理牧師に任命する。
司祭 アンブロージア後藤香織	2008年9月1日付	名古屋聖マタイ教会副牧師に任命する。
司祭 テモテ野村 潔	2008年9月1日付	名古屋聖マタイ教会協働を命じる。
司祭 ダビデ市原信太郎	2008年9月1日付	名古屋聖マタイ教会協働を命じる。

《教会・施設》

浦安伝道所(横浜)	2008年8月10日付、日本聖公会法規第161条により第2項により、教籍を置くことのできる教会となる。
-----------	---



2008年「沖縄週間・沖縄の旅」の報告

梅雨が明け、本格的な夏を迎えた沖縄にまた「慰霊の日」が巡って来ました。今年の沖縄週間は、6月20日から23日まで8教区から34名、沖縄教区からの参加者を加えて60名(22日「慰霊の日」礼拝では約90名)20代から80代までの兄弟姉妹が集い、神様からの豊かなお恵みに満たされ、学びの日々を過ごすことが出来たと思います。

63年前の6月、もはや死ぬための戦いでしかなかった無益な戦いを闘い続けている兵士達、傷を負い、累々たる屍の間隙を只々逃げ惑い、生きるためのになす術も無い無防備の住民達、勝利を目前になお砲弾、火気を浴びせる米軍の前に沖縄戦の終わりの日が来た6月、戦場の光景が想い描かれます。戦禍を潜って来た人たちにとっては、振り返りたくない、語りたくも無い、振り払いたい過去の記憶がありありと蘇ることでしょう。黙して語らず、或いは語ることの苦しみを耐えつつ戦後を歩み続けた人たちが少なくなっ

沖縄教区事務所 アンデレ 富本 盛彦
来ました。体験者による語りは無くなり負の遺産の風化が危惧されています。日常の世界に埋没している多くの日本人が過去に犯した罪を知ることが出来なくなる状況が更に深まります。私達は、今、このことに気を付けていなければならないと思います。非人間化を惹き起こした不条理の事実を私達の意識の埒外においてしまう危うさを避けなければなりません。

私達は「沖縄週間 / 沖縄の旅」を13年続けてきました。今日まで多様なプログラムを組み、回を重ねて来ましたが、いずれの年においても新しい切り口を設定し、沖縄戦、軍事基地、平和、人権、歴史について学んできました。平和を尊く思い、この地上に争いが無いように祈り、私達が平和の道具として働くために必要なことを学ぶ「沖縄週間」を続けてきたと思います。

沖縄教区外から毎年35人前後の参加者がありますが半数以上の方々が一歩で、何方も何度来ても新しい気付きがあるとおっしゃいます。

準備をするスタッフとしては、その年の沖縄の状況に応じて様々な切り口から方向性(持ち方)を検討していきますが、今年は、歴史教科書検定問題に揺れる沖縄に焦点をあて、～隠された事実 教科書検定問題から見る～をテーマとしました。

本来基調講演は、テーマに沿ったものとなりますが、蓋を開けてみると講師の講演テーマは「沖縄戦の『記憶』をどう伝えるか」となっており、参加者の中には期待を裏切られた感をお持ちになった方もおられたことでしょう。講師との折衝を担当した筆者は講演後に釈明しお許しを請いました。このような経緯がありましたが、しかし、吉浜教授の講演の内容は、教科書検定問題の焦点である「強制集団死」にも触れており、「集団自決は日本軍が深く関わったと認められる」との判断は体験者の証言が力となって導き出された、体験者の証言は重い、しかし、体験者は少なくなり、体験者自身が戦争の記憶を語ることは

非常に困難になってきており、これからは、体験していない人たちがどう伝えるかということが大変重要なことであると、過去の豊富な資料や新しいデータを駆使してお話いただきました。大変興味深く、私達がこれから平和について考え、行動するためには、非常に示唆に富んだ内容であったと思います。

フィールドトリップのガイドを引き受けてくださった日基の大城美代子氏の語りも懇切丁寧で好評でした。身近に戦争を感じる者も感じない者も、基地被害のある所、ない所、戦争遺跡のある所、無い所、各々の住まいの環境が違うことにより温度差があるのは当然のことです。沖縄だからこそ体験できること、将来の日本が見えてくる沖縄に更に多くの兄弟姉妹が集って主の示される平和への思い、を共有し学ぶことを願っています。



「沖縄の旅」に参加して

6月20～23日3泊4日で沖縄に行きました。深夜のハヶ岳は、霧と小雨でしたが、車、バス、飛行機と乗り継いで約8時間後、真っ青な海と空が私たちを歓迎してくれました。梅雨明けしたての沖縄は蒸し暑く、徒歩で移動の時は干涸びちゃうのではと思うくらい汗をかきました。63年前のこの時期、沖縄の人達がこの環境の中戦いに巻き込まれ、心身ともに疲弊していったんだと、初めて沖縄の地を踏んで、実感しました。

集合場所に行くと、何度も参加されている人達でしょうか、「ご無沙汰」「お久しぶり」と声を掛け合っています。40人前後の参加者が集合しました。早速バスに乗り旅の始まりです。途中ビーチに寄って白い砂浜と青い海、青い空を眺めました。大潮なのか、遠浅の浜辺で大人と子供がパケツに海藻か何かを拾って入れています。

木戸幸子(横浜教区 清里聖アンデレ教会)

そこにはゆっくりとした時間が流れていました。美しい沖縄を感じると同時に、63年前はどんなだったのだろうと対比して考えてしまいます。

対馬丸記念館の見学、基調講演、中部戦跡巡り、主日礼拝、慰霊の日礼拝、沖縄全戦没者追悼式と、スケジュールはびっしりです。基調講演は沖縄国際大学の吉浜忍教授が「沖縄戦の『記憶』をどう伝えるか」と題してお話いただきました。戦争を知らない私が『戦争を知る』という事は、体験者から伝えてもらうことしか無いのです。家庭では祖父母、両親、親戚から。学校では教科書から。そして多くの体験記から。特に戦争を体験した方から直接話を聞くことは心にズンと響きました。

戦後63年経って体験者が年々減って行き、もう十数年経てば語れる人がいなくなるという危機

があり、次世代に語り継ぐことが大きな課題です。また、戦争体験を語らない、語れない方もたくさんいたそうです。「語る」とは、「記憶をよみがえらせる」からでしょうか。思い出したくもない、つらい記憶の糸を手練り寄せることは勇気と覚悟のいる作業です。しかし、「歴史教科書問題」で真実を歪められた時、多くを語らなかつた方が立ち上がりました。新聞の見出し一面に載っていた県民大会の記事、写真から熱気が伝わりました。沖縄戦を風化させてはならないという覚悟と熱い思いが次の世代に受け継がれていることも確信できました。日本で唯一の地上戦になった沖縄、その惨劇を体に刻み込むことはできませんが、戦跡に足を運び追体験することによって心に刻むことはできました。ドキュメンタリー映画「ひめゆり」のポスターに『「忘れたいこと」を話してくれてありがとう』というキャッチコピーが載っていました。堪え難い痛みを伴って真実を語ってくださった方の思いを、今度は私たちの世代が語り継ぐ時が来たと思います。

現在に目を向けると、日本にある米軍基地の75パーセントが沖縄にあるのです。自衛隊基地もあります。那覇空港は航空自衛隊と共有しています。優先権は自衛隊にあるそうです。バスで移動中、高いフェンスに囲まれた緑あふれる広大な土地があちこちにありました。戦後沖縄の人達は、自分の土地を追い出され、基地にされ、

未だに返ることができずにいます。米軍による犯罪、事故、そして飛行機の爆音による住環境の質の低下。未だに沖縄は日本に完全復帰できていない状況だと見て取れました。

基地という問題を抱えている国民は本土にもたくさんいます。けれど基地問題を抱えていない人が圧倒的に多い本土では、軍隊の先にあるものが見えてこないのです。沖縄の現実をこの目で見て、生存権を脅かす基地はいらない、戦争はごめんだと強く思いました。

今日も世界のあちこちで、戦争、紛争が起きています。沖縄の基地から飛び立った飛行機が誰かを不幸にしています。過去の事実を伝えられた私たちは、次の世代につなげる責任と現実の問題に目を向け考える責任を持ちたいと思います。沖縄週間の祈りの一節に「私たちを平和の器にしてください」と記されています。主の平和の器として私は何をなすべきか。併せて考えたいと思います。対馬丸、チビチリガマの悲劇や、飛行機の爆音に耐えかねて住民が去り、土地が虫食い状態になっている砂辺地区、平和の礎に刻まれた方の名前等、伝えたいことは山ほどありますが、どうぞ皆さんが沖縄に行き、目で、体で感じてください。

スタッフのご尽力で充実した旅ができ、感謝でいっぱいです。また沖縄教区の方々の温かいおもてなしに心が満たされました。

広島平和礼拝2008『追悼と共感』

神戸教区広島復活教会 聖職候補生 ヨシユア長田吉史

今年も8月5日と6日の2日間、「広島平和礼拝2008」が『追悼と共感』というテーマで開催されました。被爆60年にあたる2005年から始まった、この広島平和礼拝も今年で4年目を迎えました。多くの方々の変わらぬお祈りとご尽力によって無事に終えることができました。

さて、今年の平和礼拝は8月5日の午前10時より始まり、まず沖縄教区の上原榮正司祭様か

ら沖縄での戦争について、また現在も悩む米軍基地の過去と現在についてのお話を上原司祭様のアングルから伺いました。続いて、神戸教区の佐藤眞一退職司祭様からご自分が実際に14歳の時に体験された被爆体験を通して被爆当時の凄まじい状況や言葉にできないほどの苦しみについてお話しいただきました。参加者全員はこの実体験を生で聞くことで、どんな資料からよりも原

爆の悲惨さを感じることができたのではないかと思います。

その後、私たち参加者は、上原司祭と佐藤司祭から聞いたお話を通して平和についてのシェアリングをした後、それぞれが抱く平和への思いをしっかりと心に留めて、夕方からのカトリックとの協同プログラムに参加しました。協同プログラムでは、まず原爆供養塔の前で祈りのつどいが行われました。つどいでは、聖公会から主教様や司祭様が代表で献水をお捧げされ、最後には、デズモンド・M・ツツ大主教の平和メッセージが朗読され、私たち一人ひとりがキリストの平和の器として用いられることを祈りました。

この祈りのつどいに続いてカトリックと聖公会合同の平和行進が始まり、平和公園からカトリック平和記念聖堂まで、聖公会からは120名近い方々が心を一つにして「アーメン・ハレルヤ」「Walk in the light」「主の道を歩み(北海道教区・池田聖職候補生作詞作曲のもの)」を歌いながら行進しました。

そして、カトリック平和記念聖堂までの平和行進を終えた後、19時30分より同聖堂において合同平和祈願ミサが行われました。カトリックと聖公会の一人ひとりが共にキリストの平和を広げるために、ことに世界平和のため、教派を越えた協働のための祈りが中心としてお捧げされました。

翌日の6日は、朝8時より原爆犠牲者追悼聖餐式が、京都教区の高地主教様に司式、大阪教区の宇野退職主教様に説教をしていただいていた行われました。式中、8時15分(原爆炸裂の時刻)には出席者全員で犠牲者に対する追悼と共感の意をもって黙祷をお献げし、ヨハネ・パウロ2世がヒロシマへの平和メッセージの中で言うように、『過去を振り返って、将来に対する

責任を担えるように』祈りました。この聖餐式の後、参加者25名でピースボランピアの方々の案内を頂き、原爆資料館や公園内の原爆の碑めぐりをし、さらに平和に対する学びを深めて、この広島平和礼拝2008を終えました。

以上のように、今年の広島平和礼拝も無事に終えることができたのですが、私個人としてはこの広島平和礼拝に参加することや行くことだけが平和の実現になるとは思いません。また、平和といえはよく言われる、戦争をなくすことや、核兵器を生産しないことだけが平和の実現になるとも思いません。私たち人間が何故父なる神様から創られたのか、そしてその神様と私たち人間はどういう関係にあるのかをすべての人間が見つめ返しつつ、平和を祈り求めていくことが大切なのではないでしょうか。つまり、人がどうだとか、物がどうだとか言う前に、キリストを通して「個」である「わたし」を見つめ返すことから平和実現の実が結び始めるのではないかと思います。私は平和を、またこの広島平和礼拝を考えるにあたってそのように思いますし、この先においてもその思いを持ってキリストの平和実現の器として歩んで生きたい、そう思うわけでありませう。



2008年「在日韓国出身教役者の集い」報告

中部教区長野聖救主教会 司祭 イグナシオ 丁胤植

8月17日～19日まで3日間、「在日韓国出身教役者の集い」が沖縄で行なわれました。今年は「日本聖公会青年大会」に韓国の青年たちも参加するようになり、日曜日に沖縄に着いて3日前からの準備会を行いました。教役者のついでに青年たちと同じ時間帯に行なうということで、プログラムが重なるなど困難もありましたが、韓国の青年たちと平和についての思いを共有し、日本に来て働いている韓国出身教役者が韓国の青年と出会い、ビジョンと展望を提示するなど有意義な時間を過ごせました。

1日目、小祿聖マタイ教会で聖餐式をもって始まりました。幼稚園の園庭で、教会の信徒さんが用意してくださった夕食を頂き、夜遅くに全員が集まり第1のセッションが開かれました。

2日目は、青年たちと一緒にフィールド・トリップに参加しました。佐喜真美術館・普天間基地に寄って、集団自決が行われた「ガマ」の中にも入りました。洞窟の中には、人が住んでいた痕跡と小さな人骨の破片が残っていて、63年前の惨状が生々しく感じられる気がしました。続いて宜野湾セミナーハウスで、沖縄教区の谷主教の歓迎会に招かれ夕食を頂いた後、谷主教により「沖縄教区の現況」を含め第2のセッションが開かれました。

最後の日は、沖縄教区センターに集まり、第3のセッションをもちいました。金根祥主教からのランベス会議の報告と「イエスは最下層民だ」というお話に続き、管区事務所総主事の相沢司祭から日本聖公会総会の決議を中心として日本聖公会の現実に対する紹介がありました。日本聖公会の現況と課題を分かち合っ、方向性を提示する目的で予定している「日本聖公会宣教協議会」、「日本聖公会宣教150周年記念礼拝」、トピック(Towards Peace in Korea (TOPIK)、世界聖公会平和大会)決議賛同な

ど、たくさんの話題が交わされ、議論されました。

下記は、今回の集いを通して、交わされた課題、希望、決議などを箇条書きしたものです。

わたしたちは、強制ではなく自らの意志で日本に来た。日本の教会の現場も大事であると同時に、同一の公共の目標を目指すべき意味を確認することも必要である。

日本の教会の現実の中で、教育資料不足に対する悩みが多く、特に子どもの宣教教育資料の必要性を強く感じ、教材開発の必要性を共有した。

各教区の代議員規定に関しては、管区が一括的に調整できることではないが、大韓聖公会及び日本聖公会、そして各々の教区が、この件について検討するように丁重に願います。

教役者の霊的ケア・再教育・延長教育などについて管区に提案する。

新外国人登録法(指紋・顔写真採取)反対について、私たちにできる行動(抗議書提出)から力を合わせて実践することを決議した。

日本聖公会宣教150周年を迎えて、日韓交流の貢献者である今村秀子さんを覚えることを決議した。

そして、この集いの組織を再確認しました。

日韓の連絡としては管区事務所総主事、研修教育などについては、韓国側は教務院とソウル教区教務局長、日本側は管区事務所総主事が担当になりました。

最後に、この集いが豊かな交わりの中で無事に終わるように、物心両面支えてくださった日本

聖公会の管区と青年委員会、沖縄教区、特に小祿聖マタイ教会、そして韓国から海を渡って来ていろいろな面で力づけてくださった大韓聖公会の先輩教役者に感謝します。

日本聖公会 全国青年大会in沖縄

「そこにキリストは共にいる」 - 報告と成果 -

全国青年大会実行委員長 松山 健作(京都聖ステパノ教会)

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。(ヨハネの手紙 1:1)

「そこにキリストは共にいる」というテーマで、聖公会の青年140人あまり(大韓聖公会青年を含む)が沖縄に集まった。私たちが、沖縄に集まった意味はどこにあったのだろうか。そして沖縄で何を聞いて、見て、触れたのだろうか。

私たちは沖縄で戦跡めぐり、辺野古を訪れ(米軍基地建設阻止運動の現場)、自然や文化に触れた。私はここで、プログラムから得たものの多くを語ることはしない。なぜなら、参加した各教区の青年が自らの豊かな感性で得たものを持ち帰っているためである。私たちは沖縄で多くの「命」と触れることができた。多くの青年が、その「命」について語るができるだろう。是非、参加者の皆様から「命の言」を参加していない皆様に伝えてほしい。そして、参加することができなかった皆様は、参加した皆様に「命の言」について尋ねていただきたい。

今大会の主題の一つとして、「命」について聞き、見て、触れるということが意図されていた。そして私たちが神様から与えられる「命」について考え、分かち合うということはかけがえのない恵みとなったのである。

最終日のプログラムでは、教区ごとに集まり主題聖句である「命の言」についてセッションをおこなった。今回、得た「命」を通して、「それぞれの現場で何ができるのか」、「何が伝えられるのか」を話し合っていた。時間に制限はあったものの、各教区の青年が今後新しく活動していくきっかけとなっただろう。全国青年大会は3泊4日の短いものであったが、それをきっかけに私たちは新しい道に踏み出して行くことが望まれている。そのようなことを自覚していただければと思う。私は、参加者の皆様が各教区において、活動を始めたところから青年大会の成果が発揮されると考えている。次回青年大会は4年後に行われることであろう。是非、次回までに今大会の成果を発揮し、それについて分かち合うことができれば幸いである。

最後に、全国青年大会を開催するにあたりご



尽力くださった関係者の皆様、大会を盛り上げてくださった参加者の皆様に感謝している。特に、沖縄教区の谷主教様をはじめとする聖職の

皆様、多くの信徒の皆様が青年大会を開催するにあたり、多大な支援をしてくださったことに感謝である。

㊦ 渉外主事の報告から

米国聖公会 EAM 会議に参加して

米国聖公会管区レベルの組織の一つである EAM (Episcopal Asian American Ministry) 主催の会議に参加したのでその報告を致します。

日時：6月6日～6月10日 5日間

場所：台湾 高雄市 (Kaohsiung) 圓山ホテル

参加者人数：約120名

米国聖公会管区レベルの宣教促進組織として African American、Native American、Hispanic (スペイン系)、Asian American (アジア系) がある。この一つアジア系の組織 EAM の主催で行われ、参加者は米国各地からの関係者と母国からの関係者約120名であった。

アジア系 (EAM) の中でも中国系、韓国系、日本系、フィリピン系、東南アジア系と人種別に教会があり、それぞれに関係する人たちが参加した。参加者リストには名前住所のみ記されていたので確実ではないが大半が聖職者であったと思われる。

プログラムの内容は、毎朝晩の礼拝、ゲストスピーカーによる主題 (Ministry in Globalising World) の勉強会、上記民族別の検討会、諸情報・リソースの共有などであった。主日には各参

加者は希望の教会 (高雄近郊で7箇所ほど) の聖餐式に参加し、午後は信徒と交わりの会を持ち、また、台湾文化の理解のために博物館や文化センターを訪問した。

この会議は毎年開催され、フェローシップと礼拝を中心に米国においてはマイリティーに属する人種の宣教活動で共通項をお互いに話し合いながら、より良い宣教活動を展開するために何が必要であるかを議論した。日本人会衆以外は基本的に信徒数は増加傾向にあり、とても活気がある様に感じられた。殊に大韓聖公会からは現首座主教でありソウル教区主教の朴耕造主教と次期ソウル教区主教金根祥主教の両師が全期間参加し、韓国の取り組み、力強さが感じられた。

国別の検討会では日本人会衆の会に参加したために、他のグループがどのような会議を持ったかは判断できないが、それ以外の場で話したことを基に判断すると、彼らはとてもダイナミックであり、活動が非常に活発であるようだ。

日本聖公会関係では MJM の理事でもあり EAM の日本人会衆担当である Ms. Chikako Tsukada と話をし、聖職者のための MJM の研修、EAM と日本聖公会の関わり方、米国の日本人会衆教会リストの整備、等に関して意見交換をした。この経験を今後の活動に役立てるつもりである。(管区事務所渉外主事 八幡真也)

『使徒信経』カード増刷しました。

本年5月に行われた第57(定期)総会決議第6号において、日本聖公会祈祷書中の『使徒信経』の一部を改正することが確定いたしました。

それに対応するため、『使徒信経』カードを増刷しました。2006年の第56(定期)総会におい

て改正の協賛が求められました折に作成したカードと同じものです。

現在カードが不足している教会はお送りいたしますので必要枚数をご連絡ください。お申し込みは教会単位でお願いいたします。

電話：03-5228-3171 FAX：03-5228-3175
メール：prsakata@nssk.org (総務主事)